

ご案内

文明フォーラム@北多摩 第 43 回研究会

テーマ：原発・核燃に翻弄されてきた
青森県の歴史と現状を共に学んでみる

日時：2025年2月8日（土）午後2時～5時（オンラインのみ）

報告者：遠藤 順子さん 内科医、市民団体「六ヶ所村の新しい風」共同代表

今回のテーマ概略

弘前大学の21世紀教育（教養教育）で開設された講義「環境との共生(D)」の意義を語って頂きます。
東日本大震災直前の2010年後期から始まった講義内容が、共著『環境・地域・エネルギーと原子力開発～青森県の未来を考える』（弘前大学出版会）として事故以降2013年に編集・発行されました。内科医の遠藤順子さんが担当された第3章「内部被曝について－放射能科学の歴史から紐解く」を中心に、勉強しましょう。

遠藤順子さんのプロフィール

室蘭工業大学工業化学科卒。1992年弘前大学医学部卒。内科医。日本核医学会 PET 核医学認定医、日本医師会認定産業医。現在、津軽保健生活協同組合・健生病院非常勤医師。市民団体「六ヶ所村の新しい風」共同代表。上記共著の他に、緑風出版から『放射線被曝の争点－福島原発事故の健康被害は無いのか』（2016年）、『汚染水海洋放出の争点－トリチウムの危険性』（2021年）が出版されている。

参加手続き：形式：ZOOM 会議

申し込まれた方には1週間前にリンク
をお送りします

参加費：500円

参加希望者は nrj27438@nifty.com

田中一弘まで、所属先のある方はご記入のう

え、申し込んで下さい

第1章 青森県・下北半島「原子力半島」化の歴史と現状
第2章 放射能，原発，事故，再処理
第3章 内部被曝について～放射能科学の歴史から紐解く～
はじめに/ 1 福島原発事故について/ 2 放射線科学の歴史/ 3 内部被曝について/ おわりに
第4章 下北半島の地質環境
第5章 青森県の経済と核燃マネー
第6章 核燃反対運動と青森県の地域づくり
第7章 原子力神話から自然エネルギーの未来へ

書籍『環境・地域・エネルギーと原子力開発～青森県の未来を考える～』の目次 ↑

関連する下記二つの参考文献 PDF もご覧ください

① 末永洋一「原子力との共生を目指す青森県」東北エネルギー懇談会広報誌「月刊ひろば」421号 2013年
<https://www.t-enecon.com/cms/wp-content/uploads/2013/04/929342c9d6b0f2379565078c3a1b3372.pdf>

② 「自然環境と再生可能エネルギーとの共生構想」青森県 2023.9.12

<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kankyo/energy/files/shizenkankyoutosaiseikanouenerugitonokyouseikou.sou.pdf>

裏面は、「六ヶ所村の新しい風 ニュース」第14号(2024年12月8日発行)に掲載された遠藤順子共同代表の訴え(要旨)です

遠藤順子共同代表の訴え(要旨)

9月24日、むつ市の中間貯蔵施設に柏崎刈羽原発の使用済核燃料が搬入されました。日本で初めて、放射能で全く汚染されてもいない、何の原子力施設もないところの、いわゆる中間貯蔵施設に使用済核燃料が搬入されたのです。

ところが驚くべきことに、「むつ中間貯蔵施設の操業は11月20日に延期する」と10月4日に発表されたのです。どうして、操業も開始していない施設に使用済核燃料を運び込めるのでしょうか。本当にびっくりました。

そして10月10日、今度は電気事業連合会が、青森県知事と六ヶ所村長に、「フランスから戻ってくる低レベル放射性廃棄物の代わりに、フランスの高レベルガラス固化体を受け入れてくれ。」というトンデモナイ要求をしてみました。宮下県知事は「理解もできないし、協力もできない」と突っぱね、「門前払いする」ということだとも言いました。とりあえずは、よかつたと思います。しかし、そもそも、「なぜ、こんなおかしい要求が出てくるのか」ということです。

宮下県知事は、六ヶ所再処理工場が延期延期で完成もしないのに、核燃料税が欲しくて、むつ中間貯蔵施設に使用済核燃料を受け入れました。そういうことも、無理な要求が出てくる一つの要因だろうと私は思います。(右左上につづく)



2024年10月12日(土)の六ヶ所行動の訴えの動画をQRコードから視聴できます

「六ヶ所村の新しい風」は、毎月1回、六ヶ所村内で街頭宣伝やチラシまき行動をしています。



山田清彦の訴え



遠藤順子の訴え

追悼

去る11月8日、泊地区在住の種市信雄さんがお亡くなりになりました。謹んで哀悼の意を表します。

種市さんには、市民団体「六ヶ所村の新しい風」設立当初より、顧問を引き受けていただいております。また、六ヶ所行動においても共に街頭に立ち下され、さらに、村長選に際してはご自宅を選挙事務所として提供していただきました。ブーイングすることなく核燃サイクル事業のウソ・ゴマカシを糾弾し、金のために故郷を売り渡す政治家たちの姿勢を批判し続けていました。私たちは、種市信雄さんのご遺志を引き継ぎ、国が再処理政策を撤回し、六ヶ所再処理工場が凍止措置と決定されるまで、闘い続けます。

国や企業からすれば、「青森県はお金を払えば使用済核燃料も受け入れてきたのだから、また金さえ積めば高レベルガラス固化体20本も受け入れるだろう。今までも受け入れてきたのだし…」ということになります。むつ中間貯蔵施設への使用済核燃料搬入に反対してきた人たちは、「足元を見られることになるよ。核のゴミも引き受けると思われてしまうよ。最終処分地にされてしまうよ」と、ずっと心配してきました。今回のことは、実際、国や事業者に足元を見られているというこの証ではないでしょうか。ですから、「今後また次々と似たような話がやってくるのではないかと私たちは心配しています。しかも、再処理工場もMOX燃料加工工場も低レベル廃棄物受入れ・貯蔵施設も、完成は延期されています。いったん核のゴミを受け入れれば搬出する場所はないのです。結局、青森県に置き去りにされる可能性が高いのです。

今、宮下県知事は電事連の無理な要求を断っていますが、知事が今後も断り続けるかどうかはわかりません。次の知事もどうするかはわかりません。お金が欲しくて、いつか無理な要求も受け入れてしまうかも知れません。そうなればもう、青森県が最終処分場として狙われるのは明らかです。

ですから、もう再処理はやめなくてはなりません。「青森県には、もうこれ以上、使用済核燃料もガラス固化体も要らない」とはつきりと言い、再処理工場の廃止工事を開始しなくてはならない。そうしなければ、青森県は最終処分場にされてしまうと思えます。



2024年9月1日 六ヶ所行動に参加した種市信雄さん



私たちを空から見守っていてください。種市さん、今まで本当にありがとうございました。

市民団体「六ヶ所村の新しい風」会員募集中！年会費1000円(減免あり) 会員には通信などをお届けします